

## 景観的見地からみた伊保廃寺

梶原 義実

### はじめに

伊保廃寺は本書冒頭でも示したとおり、遺跡地のすぐ南に段丘崖が迫ることから、南面する古代寺院としては不適な立地であると考えられてきた。しかしながら今回の伊保廃寺の発掘調査成果から、伊保廃寺が立瓦で化粧された明確な基壇をもっていたこと、その後平安期頃にも基壇規模を拡張しつつ建物が存在したことをあきらかにし、さらに基壇の向きについて、南面ではなく、北方または東方を向いていた可能性を指摘した（本書第1部第6章1節）。

筆者はこれまで、古代寺院の造営背景を考えるには、周辺景観との関わりの中で寺院遺跡をとらえる必要があることを指摘してきており（梶原 2017 など）、その中で数少ない南面しない寺院についても、それぞれ固有の事情であえて南面させていなかったことを論じてきた（梶原 2020）。本稿では伊保廃寺についても、周辺の地形や遺跡動態等、景観的見地から、伊保廃寺がこの位置に造営された事情について考究したい。

### 1. 伊保谷の地勢と伊保廃寺の立地

伊保谷は伊保川によって開析された谷底平野である。伊保川の流路は現在は河川の付け替え工事により、南岸の段丘崖を直線的に流れる形となっているが、第1図に示すとおり、かつては伊保廃寺の真北で大きく北側へ蛇行しており、廃寺東方で南段丘崖に戻ってくるような流路であった。伊保廃寺の付近はこの蛇行する伊保川の内側の安定した堆積面である低位面となっている。

対岸の同標高（標高 68～70m 前後）の低位面には北方から伊保川への、伊保堂川など小河川の流れ込みによって緩やかな扇状地が形成され、弥生～古墳時代の集落である伊保遺跡が位置している。

地形は伊保廃寺・伊保遺跡のあたりから東方に向かって河川流路に沿って緩やかに東に下っており、伊保川沿いに東西に細長い沖積低地を形成しつつ、籠川、さらに矢作川との合流点へと繋がっていく。

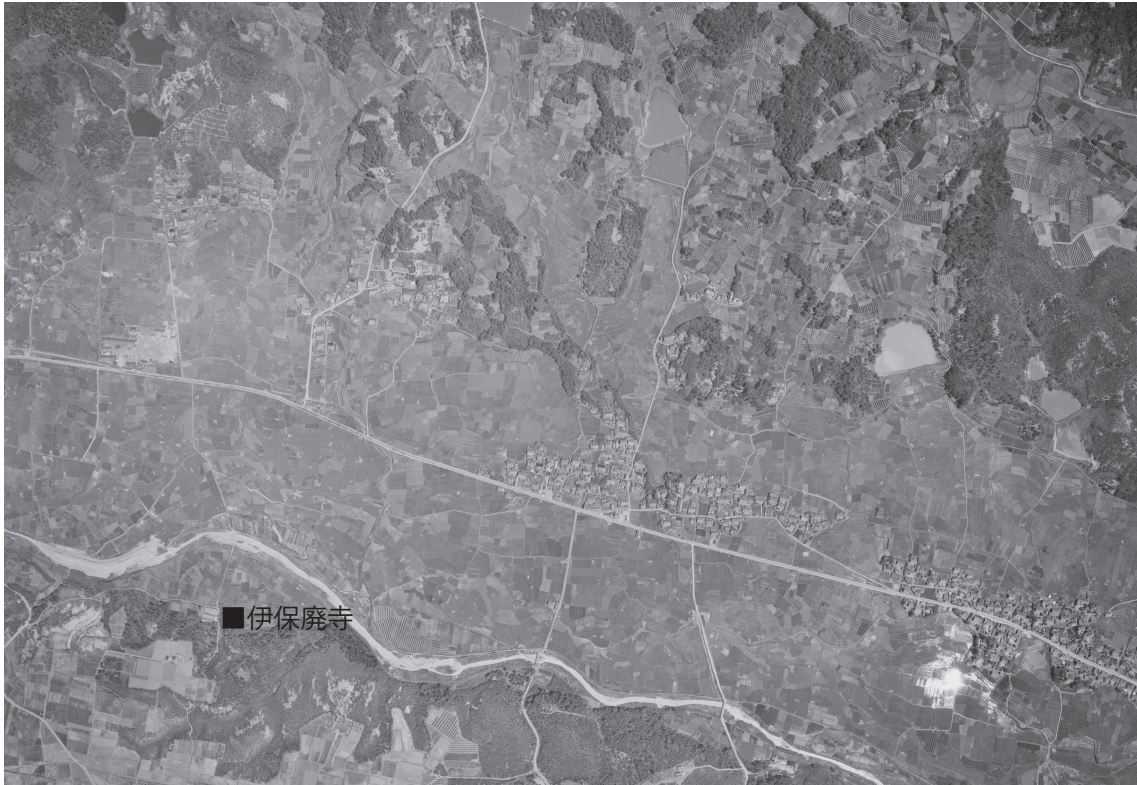
### 2. 伊保谷における集落動態

伊保谷におけるもっとも顕著な集落遺跡は、伊保遺跡である。伊保廃寺の対岸低位面に位置しており、弥生時代から古墳時代にかけて、多くの竪穴建物からなる集落が形成されている。

ところがこの伊保遺跡は、6世紀中葉頃に最後の盛期を迎えた後、7世紀初頭の須恵器を最後に廃絶しており、伊保廃寺の造営時期まで集落は存続していないことがわかっている。その理由として、伊保遺跡四反田地区の遺構上層に多数の礫を含む黄褐色土層が覆っていたことから、洪水の影響が考えられている







第2図 伊保谷の空中写真（1963年撮影 国土地理院）

### 3. 立地からみた伊保廃寺の造営事情

このような地勢の様相と、それによる集落動態の変遷を考慮すると、伊保廃寺が南面して造営されなかった理由もおのずと理解できる。伊保廃寺造営時、伊保川中流域北岸はきわめて不安定な荒地であり、洪水の危険性もあることから、寺院造営の適地とは言い難かった。それに対して蛇行部内側の伊保川南岸は、蛇行部に沿ってある程度の広さをもつ安定した堆積土壌が形成されており、南面した伽藍を置くことは難しいものの、寺院という大規模な建造物を配するには適当な場所として選択されたものであろう。

この位置に寺院を置くからには、寺院の向きは先述（本書第6章第1節）したように、北面または東面せざるを得ないが、本論冒頭でも述べるとおり、特定の事情により南面しない古代寺院は、珍しいながらも類例がないわけではなく、伊保廃寺もそのひとつであると考え。その間の事情については、周辺の地形や地域動態の中で考えていく必要があり、以下次節で述べていく。

### 4. 伊保谷・亀首谷における古代の地域動態

前節まで述べてきたように、伊保廃寺が伊保川南岸の段丘外付近に造営されたおもな理由として、南面する寺院を造営可能な伊保川北岸の伊保遺跡付近が、寺院造営時に荒地化していた点および、それに対する南岸の安定した地勢的特徴に求めた。しかしながら、寺院を地形的にあえて南面させずに造営した理由としては、そのような消極的な消去法による選地のみに留まらず、それはそれで意味があった（きちん

と意味を持たせている)と筆者は考えている。

今回の調査成果のみでは、伊保廃寺の建物や伽藍が、北面していたのか、それとも東面していたのかを結論づけることはできなかったが、仮に北面していたとしたら(第3図)、対岸丘陵部には、矢遠古墳をはじめ、開口部を南面させる後期群集墳が形成され、さらに先述の江古山遺跡のような古代集落、伊保神社などが連なっており、これらと対置する位置に伊保廃寺は選地されている。筆者は先稿で、広島県横見廃寺の事例において、古墳の開口部を意識しつつ寺院の方位(本尊の向く方向)を設定したことをあきらかにしており(梶原2020)、距離はやや離れるものの、伊保川流域という農業生産拠点を挟んだ宗教的モニュメントの対置関係として、伊保廃寺の選地を考えたい。さらに、古代寺院造営においては、神南備が強く意識されていた事例も多いこともこれまであきらかにしてきており(梶原2017など)、猿投山を北東に遠望できるということもまた、選地にあたり強く意識していたものと思われる。

仮に東面していたとしたら(第4図)、伊保川下流域から籠川との合流地点のほうを望んでいたことになる。亀首遺跡から古代の馬鍬が出土していることから(高橋2011)、伊保廃寺や舞木廃寺から遠望できる伊保川・籠川下流域が、古代においても水田適地として機能していたことはあきらかである。また、先述の新金山遺跡や、梅坪遺跡における古代の大集落の形成など、集落が各谷底平野内部の段丘面などから、伊保川と籠川、さらに矢作川との河川合流地点など、物資の運搬に便利な水上交通の要衝へと集中、集住が進んだものと考えられる。河川合流部における拠点集落の形成、そこから谷底平野奥部に向け、生産拠点としての沖積低地が河川下流域に広がり、さらにその奥部の低位面や丘陵部には、奥津城として宗教的モニュメントである寺社が配され、祖先信仰の対象としての古墳も分布しているという景観構成は、南流する籠川流域と、東流する伊保川流域において、河川の流路に沿って90度回転させると見事に一致している。隣接する谷底平野という空間において、共通の地域景観が形成されていることは非常に興味深い。

以上をまとめたのが第5図である。

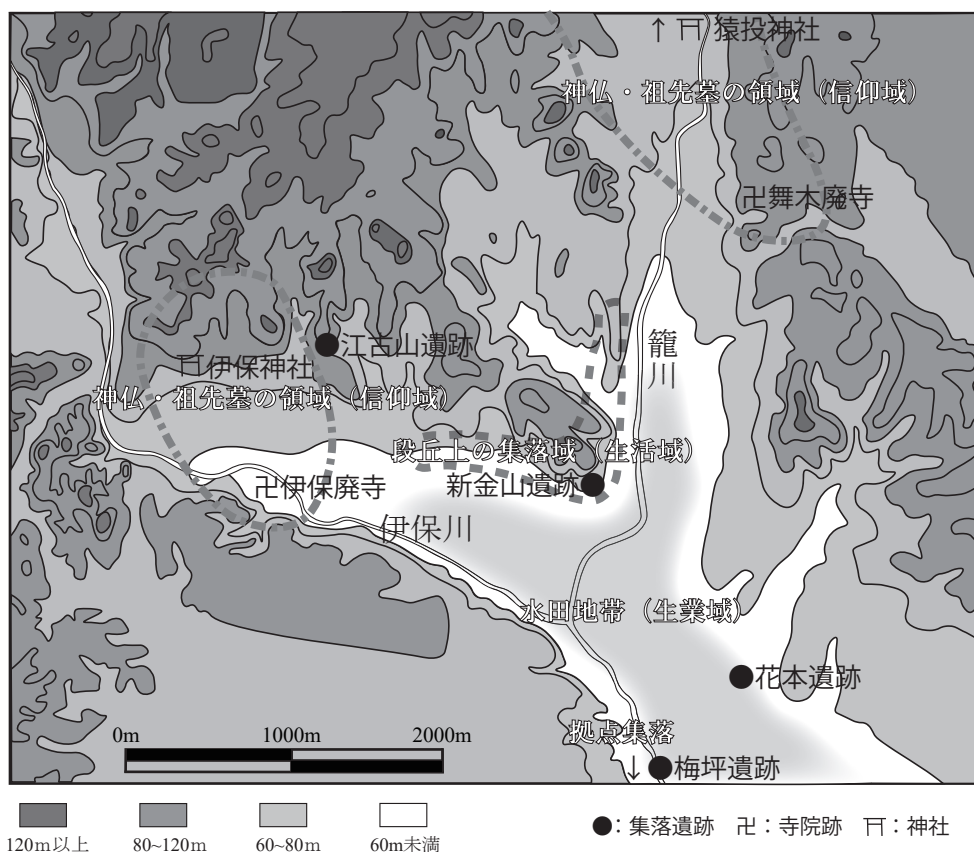


第3図 伊保廃寺上空より北方を望む



第4図 伊保廃寺上空より東方を望む





第5図 伊保谷・亀首谷の地域動態

## おわりに

以上簡潔ながら、伊保廃寺の発掘調査成果に基づき、地域景観の中に伊保廃寺を位置付けることで、伊保廃寺が南面しなかった理由について考察を加えてきた。これまで古代寺院は南面するものと常識的に考えられてきており、それは多くの寺院においては誤りではないものの、地勢や自然環境、地域ごとの遺跡動態の中で、寺院の位置や向きはそれぞれの置かれた事情の中で選択されていることもまた強調すべきであると考え。

日本全国で700とも800ともいわれる古代寺院の多くは、瓦が出土する、礎石が残存するなどからのみ寺院遺跡と認識されており、建物の構造や伽藍配置などはあきらかとなっていない。しかしながらそれらの諸寺においても、地域景観の中でどのように寺院が配置されたのかを考えることは可能であり、また古代寺院造営の意味や意義を考えるにあたって必要な作業であると考え。

## 主要参考文献

- 梶原義実、2017、『古代寺院の造営と景観』、吉川弘文館：東京。  
 梶原義実、2020、「『聖域型』寺院をめぐる景観構成」、名古屋大学人文学研究科論集3、名古屋大学人文学研究科：名古屋。  
 高橋健太郎、2011、『亀首遺跡』、豊田市教育委員会：豊田。  
 田端 勉、1978、『豊田市埋蔵文化財調査集報第6集 寺院址』、豊田市郷土資料館報告16、豊田市教育委員会：豊田。  
 永井邦仁、2010、「第2章主要遺跡解説 第2節三河 1官衙・寺院・瓦窯 (1) 西三河」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』、332～384頁、愛知県：名古屋。

- 永井邦仁、2012、「西三河における古代寺院の成立」『東海の古代3 尾張・三河の古墳と古代社会』、352～370頁、同成社：東京。
- 永井邦仁、2017a、「第2章主要遺跡解説 第2節保見地区（旧賀茂郡）26伊保古瓦出土地」『新修豊田市史 資料編 考古Ⅲ 古代～近世』、166～171頁、豊田市：豊田。
- 永井邦仁、2017b、「第2章主要遺跡解説 第3節猿投地区（旧賀茂郡）30舞木廃寺 31舞木古窯 39上小田古瓦出土地」『新修豊田市史 資料編 考古Ⅲ 古代～近世』、192～201、234～236頁、豊田市：豊田。
- 永井邦仁、2017c、「第3章集成・特論 第1節古代・中世の寺院と瓦」『新修豊田市史 資料編 考古Ⅲ 古代～近世』、724～730頁、豊田市：豊田。
- 森 泰通ほか、2013、『江古山遺跡』、豊田市教育委員会：豊田。